



# 里山で見つけた宝物、パチリ！



## ●里山観察に出かけよう●

【持ち物】長袖、長ズボン、歩きやすい靴、帽子、水筒、タオル、カメラ。必要な人は、日焼け止めや虫よけスプレー。保護者は救急用具、携帯電話など。  
 【マナー】立ち入り禁止の場所に入らない。公園などでは動植物は持ち帰らず、写真を撮って観察しよう。  
 【注意】マムシやハチなど毒のある生き物に注意。事前にどんな場所か下調べを忘れずに。

## 東京・八王子の長池公園

未来について読者と取材し考える朝小50周年企画・未来を見に行こう「こども会議」2回目は人が関わることで保たれてきた自然「里山」で開催しました。みんなは美しい、きれいなと感じた「宝」を写真で発表し、それを100年後の子どもたちに伝えるにはどうしたらいいかを話し合いました。

(今井尚、寺村真彰、八木みどり)



草笛のふき方を教える内野園長と、これも東京都八王子市の長池公園



カメラを持って里山を歩くと、いろいろなものが発見できました

## 自信持ってシャッター切ろう



動物写真家 前川貴行さん

写真を撮る時、一番大切なのは自分が本当に面白く撮ったかどうかわかることです。こんな写真も撮ってつまらない、人に面白くないと言われるかもしれないと思わず、自分が面白いと思

ったら自信を持ってシャッターを切ろう。上手に撮ろうとか、カッコよく撮ろうとか考えなくていい。人に何を言われようが自信を持つことが大切です。また、写真の大きな役割は、自分の発見を人に伝えることです。写真を撮ったらおうちの人や友達などにどんどん見せて伝えよう。



長池公園の 内野秀重園長

## みんなの目のつけぎょうに安心

手入れする人がいなくなったり、外来種が侵入したり、里山にはいろいろな問題があります。一番心配なのは、人が里山に無関心になることで

す。でも、みなさんと歩いて安心しました。虫にすみつかれ、ちょっと病みかたになった葉を撮った門岡さん。広い里山の中ではきつと、その虫にも役割があり必要とされているでしょう。それをそのまま撮りました。

岩本さんは「増えているんですか」と質問してくれました。昔の里山には放置された倒木は少なく、キノコも少なかったはず。でも今は倒木もキノコも多いのです。今の里山を象徴する様子に注目して見ました。大人が見落としがちな部分にも注目し、里山の今を発信してくれたことがうれしかったです。



カメラの取り扱いを教える 前川さん(右)



柏木美穂さん(神奈川県・5年) ホタルブクロ。全国各地でいろいろな名前が付けられているところが素晴らしい。草刈りをする人が刈らないように看板を立てたいと思います。前川 構図が素晴らしいです。ぶれずに集中して撮ることが伝わります。



白比野菜奈さん(神奈川県・4年) ミミズ。こんなに大きいミミズがすめる、いい環境なんだと思いました。いじめたり、すみかをつぶしたりしてはいけません。前川 足元のミミズに気づかせてくれました



西尾優杜さん(東京都・5年) アオドウガネ。背中の色がきれいに輝いていました。よくフンをする虫で、僕も手にのせたらフンをされました。前川 指にのせて撮った、技ありの面白い写真。なかなかやるな！



大佐真結子さん(神奈川県・3年) ヒヨドリ。ピーヨ、ピーヨと鳴く声が素晴らしい。里山を大切にすれば、食べ物が増え、ヒヨドリも元気に暮らせるんだらうな。前川 ほかにも気づかなかったヒヨドリ。上手に撮れました



神谷はなさん(埼玉県・6年) 田んぼの風景。稲が青々としてるところが素晴らしいと思いました。麺やパンじゃなくて、もっと米を食べたいと思いました。前川 長池公園の自然を象徴するような1枚を上手に撮りました



河野心優さん(神奈川県・5年) クサレタマ。黄色の花を咲かせます。園長さんに取材して、湿地に生える植物だと知りました。前川 めずらしい花だそうです。花だけでなく奥行きある写真に仕上げました



川村夏嬉さん(東京都・5年) ヒメジョオン。身近な雑草ですが花がかわいらしい。でも外来種なので、少しずつでも駆除するのがこの花のためにもなるのかな。前川 すごく美しい写真です。花の存在に集中していました



門岡健人さん(埼玉県・5年) ヌルデフシタニのつくるこぶ。ヌルデにはいろいろな虫こぶがつき、中にはインクの原料になるなど、役に立つものもあるそうです。前川 葉っぱが変だと思って撮った写真。疑問を素直に収めました



岩本花恵さん(埼玉県・3年) モエギタケ科の一種。木を分解しているなんてすごいと思った。キノコを大事にしなければ。前川 やぶをかき分け、蚊にさされながら、キノコに向き合っていました

プロと歩いて観察・撮影  
 東京都八王子市の長池公園は、1970年代を中心に開発された多摩ニュータウンの中に残された、約20ヘクタールの里山です。約800種の植物のほか、ノウサギやタヌキ、アナグマなどのほ乳類も見られます。

園長の内野秀重さんと、朝小で「生き物たちの地球」を連載(隔週日曜)する動物写真家の前川貴行さんといっしょに今月上旬、カメラを持って公園内を歩きました。雑木林に沿った遊歩道の最初の500メートル

ルほどを歩くのに、40分以上かかりました。3歩進めば新たな生き物を見つけ、また3歩行けばちがった花を見つけられるからです。前日から降り続いた雨が上がり、葉っぱの上の水玉がきらきらと輝きます。

身近な自然、いつまでも  
 す。本格的なデジタル一眼レフカメラで、奥行きある花の写真を撮る子もいました。道に出てきた長さ20センチほどのミミズを手にのせたり、草笛を作ったりしながら約2時間歩き、写真を撮りました。内野さんは「里山で出会った生き物は、時期によっては見られないものも

います。今日を逃したら来年まで出合えないかもしれないですね。その日の出会いを大事にしてほしい」と話します。午後、たぐさんの写真から1人1枚を選び、内野さんに名前や里山の役割、今の課題などを取材しました。そして100年後に残すために必要なことを発表しました。